

第4号

発行

小松同窓会本部

〒923 小松市丸内町二ノ丸15

石川県立小松高等学校内

編集人 宮崎 榮

小松同窓会 会報

飛べないといふことの
自覚が、ここに立ち続
ける勇気を与える。

(エンブソン)

宇宙にかける夢

「小松高出身で、名古屋大付属宇宙線望遠鏡研究施設を創設するなど宇宙科学の第一人者として知られる関戸弥太郎博士の顕彰碑が六日、同校の前庭東側に完成した。この春卒業する四百五十一人が卒業記念として母校に寄贈したもので、卒業式当日の七日、生徒たちにお披露目する。(後略)―北国新聞

〔前略〕石碑は、小松産の滝ヶ原石を使った高さ一・五メートル、幅約八十センチ。正面に関戸博士直筆の短歌を記した木彫の碑文を配し、裏に経歴板をはめ込んだ。五個の石を一個ずつ左右にずらして積んである。

前庭東側に設置され、短歌に詠まれているサルスベリ一本が碑の後に植樹された。井口校長は『形は試行錯誤を繰り返しながら自分の世界を築いた博士をイメージした』と話している―北陸中日新聞

右は、平成四年三月七日付地元二新聞に発表された関戸弥太郎博士(中学26回)の顕彰碑に関する報道の一部である。

碑文の短歌は、博士の歌集『旅の小窓』の中にある

百日の花紅に学び舎の門辺に匂う頃
を夢みつ

という一首で、博士に師事された亀淵

迪氏(中学42回)の斡旋により、博士直筆の色紙から写したものである。経歴板には、博士の略歴が次のように刻されている。

関戸弥太郎 理学博士、物理学者、名古屋大学名誉教授。明治45年(一九一二)小松市八日市町生まれ。小松中学、四高、北大理学部物理学科卒業。中谷研究室で人工雪の研究に従事。後、理化学研究所に入り、宇宙線の研究を始める。戦後、名大教授となり、宇宙線研究グループを組織。米国留学後、名大理学部付属宇宙線望遠鏡研究施設を創設、施設長となり、宇宙線源探索の世界的拠点として活躍、中日文化賞受賞。一方、日本地球電気磁気学会会長に就任、長谷川杯を受ける。他、学際研究へ向けて国際会議等を主宰し、太陽・地球間物理学の新分野を開き、宇宙科学発展に貢献。勲三等旭日中授章授賞。昭和61年(一九八六)没。

木彫の碑文とステンレス板の経歴板の製作は、大西勉氏(中学41回)の手を煩したものである。



関戸弥太郎歌集

「旅の小窓」抄

寒空の銅羅よ孤独に俯けば波ひたひたと舷を打つ
(青函連絡船)

札幌の宮の森にその人と澄む青空を見し日忘れず
(北海道大学)

上斜里に春は未し観測の器材馬橋に林縫ひゆく
(知床半島)

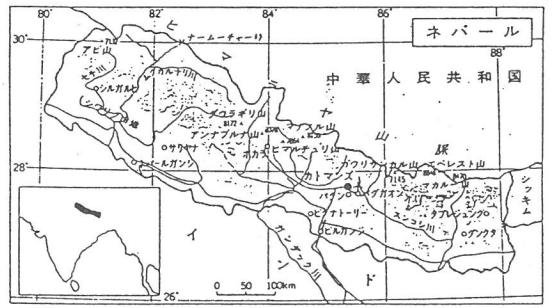
青空に光る十勝のの頂きを我がアイゼンは今踏まんとす
(十勝岳)

カルメンの国なつかしみピレネーの巖に立てば粉雪降りしく
(スペイン)

石だたみ轍蹄の音響くローマの丘の街の灯
(イタリヤ)

少年の夢に描きしサラセンの宮のバチオの池に澄む水
(セリビア)





世界の高峰がひしめくヒマ
 ラヤを一度自分の目で見たい
 という念願が叶いヒマラヤト
 レツキングへ参加することに
 なった。乾季を利用してネパ
 ールの首都カトマンズに入る。
 カトマンズは標高一、三三〇
 mの盆地で冬はヒマラヤから
 吹き下ろす冷たい風が強く、
 青天となる。日中と朝夕の気
 温の差が大きいので夏と冬の
 衣類を用意してゆく。時差は
 日本から見ると三時間十五分
 遅れとなる。アンナプルナホ
 テルに一泊してポカラへ発つ。
 飛行機の遅れるのは何時もの
 ことながらこの日は定刻に離
 陸し幸にも機上より七、〇〇
 m、八、〇〇〇mの峰々が見

える右側の席に全員座ること
 ができた。ポカラ飛行場は滑
 走路が舗装もされず、土煙を
 あげて着陸する。現地の人、
 サーダ(総指揮)に出迎えら
 れて、オンボロバスに揺られ
 ること一時間、スイケットで
 下車して麦畑に囲まれた地で
 初めて昼食、近所の子供らが
 もの珍しく集ってくる。一人
 かと思ひ鉛筆等を渡すと直ぐ
 に別のたくさんの手が出てく
 る。昼食場所の周囲を土産物
 の店が囲む。ペティという部
 落から山道を歩き出すことに

ネパールの山旅

高林 叶子

なる。一行は当方が十四名に
 対し、サーダー一名、ガイド
 一名、シエルパ四名、ポーター
 十三名、コック二名、ウェー
 ター三名、現地の人は計二十
 四名の編成となる。山道に入
 ると昔からチベットに通ずる
 道で荷物を積んだ驢馬の群と
 行き違ふ。見渡す限りの段々
 畑の中をノーダラまで約二時
 間の登り道、色とりどりの高
 山植物が花を咲かせて心が和
 む。貧しいが自然が美しいネ
 パールの山村の生活を肌で感
 じながら変化に富んだ道をす
 すみ、第一目のキャンプ地、
 ノーダラ(一、四四三m)に

着く。先着の現地人によって
 テントの設営がはじまり、テ
 ントは十個作られる。いま登っ
 てきた山間の段畑の道を目で
 追いながら異国に居ることを
 思う。食堂となるテントの中
 で夕食はランプの灯の下でと
 る。ネパール料理もおいしく、
 思い思いに話し合う。食後、
 降る星の下、キャンプファイ
 ヤーが燃えて火の粉がとび、
 刻の過ぎゆくのも忘れて歌う。
 霧の中、アンナプルナの嶺々、
 マチャプチャレに見守られな
 がら寝袋に入る。朝六時テン

トの前に洗面器一杯の湯とお
 茶が運ばれてくる。谷を隔て
 て明日キャンプする予定のダ
 ンパスの山を望みながら朝食
 のお粥のおいしかったこと。
 八時出発、河原までノーダラ
 の山を下ってまた、ダンパス
 へと登ってゆく。途中、植物
 を観察しながら、ガイドやポ
 ーターと行動を共にするので安
 心して快適な山旅を楽しむこ
 とができた。ノーダラより、
 ダンパスまで五時間余り、途
 中の河原にて昼食。パン、オ
 ムレット、野菜サラダと日本食
 の感じでコーヒーミルクが美
 味しい。昼食後又、山道を登

る。途中の部落は山肌によべ
 り落ちそうに建っている。ど
 の家にも牛や鶏が飼われてい
 る。遠くの谷間に乾季で水の
 あまり流れていない一本の川
 が通り、その彼方にテランコッ
 トの山が望まれる。また驢馬
 の一行が下山してくるのに出
 合う。荷物を運んだ帰りらし
 く首につけた鈴の音を響かせ
 て木箱を二つ、三つ背に合歓
 の花の散る山道を駆け下りて
 ゆく。峠道に着いた途端、名
 峰マチャプチャレ(六、九九
 七m)が姿を現し、二日目の
 ダンパスのキャンプ場(一、
 七八八m)が一望できて足も
 軽くなる。降る如きオリオン
 の下、夕食後は、キャンプファ
 イヤーの燃えつづく中、現地
 の人らは太鼓を叩き地酒を酌
 み交して歌い踊る。日中は暑
 いのに陽が沈むと急に寒くな
 り厚着する。テントの中で寝
 るとき乾季のためマスクをつ
 けると風邪の予防にもなる。

使い捨てカイロも使い、睡眠
 を充分にとるよう心掛ける。
 十五日、朝食前の六時より往
 復二時間の行程で全山こぼれ
 んばかりの名楠花の山を見に
 出掛けた。帽子やリュックに
 名楠花をさして下山、夜が明
 けてはつきり姿を現してきた

アンナプルナ、マチャプチャ
 レ等の山々をたたえ合い記念
 写真をとる。スイケットまで
 下り、途中、木に登って遊ぶ
 鶏を見る。平地が少なく山肌
 に瘦せた段々畑が続き、大自
 然と共に生きて天に任せて生
 活している。ネパールの人々
 の暮しは私たちの忘れてはな
 らないものを思い出させてく
 れる。ポロバスに揺られてポ
 カラのホテルに着く。ホテル
 前庭より連峰の景観が素晴ら
 しく八、〇〇〇m級の山々が
 眼前に迫り思わず立ちつくし
 てしまった。

空を刺すこと残雪のマチャプ
 チャレ
 オリオンの真下テントのあたり
 消す
 驢馬の鈴花菜のまつただ中すす
 む
 ダンパスの丘に野宿の懐炉抱き
 登り来て撮る名楠花の天に炎ゆ
 (県女27回)



御来迎

打田 興一

石の上にも三年という言葉がある。三というのは、何事の場合も、一つの節目を表わす数字のようだ。入手した会誌が、早くも三号だったが、一つの節目に達したということになるのか。其の編集振りの卓越さを見るにつけ関係者の御苦労が偲ばれることであるが、一層の発展を念じてやみません。

新年を迎えて、私は昔風に言えば、八十九歳、八十九の馬齢を重ねて来てしまった。昨年米寿となったのを機会に、会社から一切手を引き、僅かに二、三のゴルフ倶楽部の役員に名を止める有閑の身となつたが、身体の方は暦年に関係なく至極元気で、誰からおお年には見えませんねと言われ、喜んでゐる。現役から身を引いたのを機会に、自分なりに自画像を画いて見た。残念乍ら、そこに漂っているものは、過去の栄光でも何でもなく唯、広漠たる空しさだけだった。勿論、在るが仮を吾が人生の信条としている身にとって斯の空しさこそ当然

の帰結であつて然るべきかと納得せざるを得なかつた。これからも「在るがまま」を信条に生き続けることであらう。

東京に住みついて既に三十二年、小松での二十数年に較べれば遙かに永いのだが、少年時代の一年は、観念的に、大人の一年より永い故、吾が

人生と言へば、小松が第一に脳裏に浮んでも可笑しくなからう。終戦後の数年間、疎開した仮に小松に居た頃は、毎夏のように、家族と共に、白山だ、立山だと、登山を楽しんだものだが、或る年の白山登山の折、真実の御来迎に遭遇し、ひどく感激したことがある。頂上で日の出を拝んだあと、紺屋が池の方へ降り引返そうとした時のことである。

突然、谷間から黙々と白い霧が吹き上がつて来たかと思つた間に、つい目前に經三米位の虹の輪が出来、其の中に太陽を背にした私達夫婦の影がくつきりと浮んだのだ。御来迎だと、どちらからともなく感激の声を挙げていた。そんなことは、再三の登山に於ても、曾つて経験したことが無く、またそれが吾が懐しの白山での出来事だただだけに、

終生忘れ去られることはなからうと思つている。

(中学19回)

森君のことなど

遠藤 幸三

中学5年のとき森茂喜君と座席が隣り合わせになった。今から6年ほど前、生前の森君が私の祝いの会にきて、スピーチをしてくれた。「遠藤君は試験のとき、私の答案が白いのを見て、俺の答案を写せと、机の縁からたらしてくれた。私はこわくてどうしても写せなかつた。」この話は私の記憶になかつたが、当時の私ならやりそうなことだ。

あの頃は試験のとき冒険をおかして困っていた奴を助けることは、友情のあかしで、英雄的行動と信じていた。私はしきりと教えてやりたかつたが、私よりできぬ奴はなかなか見つからなかつた。女性はやさしいから助けあうだろうと、近所の娘に聞いたら、みな上体を机の上におつかぶせ、腕で答案を囲み、隣りに見られぬように書きますと、私の悪事をとがめるように言つた。

あの頃は、女性を女神のように優しいいきものと誤解して

いたので、そんなじゃけんなものだったのかと失望した。冬の昼休み、控え所の隅の大火鉢をとり囲んでいる。今日の午後はさぼりたい、とつぶやくと、森が頭を炭火に近づけて熱くしてから、教員室に走れと教えてくれた。その通りにして担任の国語の畠山先生の前に立つと、先生は私のひたいに手をあてて、うん熱があるすぐ帰れと言つた。

(中学26回)

近況

岡本 春樹

先生はやかましましやで叱つてばかりだったので、こわかつたが、授業に熱心で講義が分かりやすいので、気があつた。

ある時、この語は英語のオプテンに当ると説明し、黒板にoptonと書いた。皆が笑うと何がおかしいと叱られた。

畠山先生はオプテンと発音する明治時代の先生に習つたことを知つた。小松中学で習つた英語は、どの科目より役立っている。今でも使わせていただいている。ただし、大正時代の先生の英語は会話には、全く通じない。独文を出た先生が赴任してきて、targetをダンガー、sometimesをソメチメと発音したという伝説があつた。当時は解釈が重点で、まさか生涯で白人と口をきく

世の中がくるとは誰も思わなかつた。



(中学26回)

近況

岡本 春樹

非常時といわれる中学時代でした。五年生の九月満州事変がおき、以来戦争が益々拡大し、国民全体が火の玉になり、海水のお汁をすすする程の飢餓の中で終戦になった。

ほっとしたら年齢三十を過ぎ、青春は過ぎ去つていた。しかも多くの同級生や知人達は命さえ失つていた。生きていただけで喜ばなければならなかつた。

飢餓から立ち直り、生活も普通になり始めた頃は定年退職の年齢。

ところが日本人の勤勉努力が実り、またたく間に世界一、二の金持ち。そして国を挙げ

てのグルメブーム、世界中の

食品が日本に流れ込み忽ち飽食時代に。東京一日の残飯が五万人分とか、生活廃棄物の捨て場がもはやなくなるなど大きく。

私も老妻と老いの戯言のように「結構な時代になったもんなや」「スーパ―や食堂の売れ残りはどうするがやる。」「近頃は衣食足って礼節を忘れるになったのやろか」「勿体ない、勿体ない」などとぼやく。若い人らには「爺ちゃん、またあんなこというとる」と厭がられるようだ。

それでも老人のくせによく喰い、まだまだ長生きしそうだ。しかし盛者必衰の理、いつまでこんな時代が続くだろうか。

その中、地球がこわれるのではなからうかと心配する。

無農薬野菜を作りながら、畑でこんな矛盾だらけのことを考えたり、歴史上にもめずらしい変転の激しい時代を生きた自らを思い返している。

(中学29回)

実用書道

北山 盛久

昭和十二年に母校を巣立つから、既に五十数年になる。

同窓会報編集集氏から投稿の御依頼を受けたが、現在東京の一隅に閑居している身には、随想などと大それたものは書くべくもない。生存の証しとするつもりで、老いのたわごとを綴った。

昨年ふとしたことから、実用書道の講習会に参加することになった。僅々一ヶ月半の期間であつたが、実に多くのことを学んだ。

当今、ワープロの驚異的な技術進歩にもかかわらず、毛筆筆写の必要性が益々高まっている。その範囲は、封筒の宛名書き、賞状、挨拶状、机上名札、掲示物等々、多種に渡っている。丁重の心を表わし、美的好感を与えるには、毛筆書きに勝るものはないようである。

実用書道の基本は、「正しく、美しく」である。そのためには、常用漢字(筆写に許容される字体を含め)を完全にマスターしなければならぬ。また、個々の文字についての美的表現技巧にも習熟しなければならない。

たかが実用書道と侮ってかかったが、奥の深さに驚かされた。いわゆる書道(芸術書

道)とは、一段下級の分野と見ていたことは大きな誤りであつた。両者の間には、多くの接点があり、本質的には一つに帰着するものであると考えられる。

乗りかかったら、極を究めたい性分の身は、どうやら忙しくなってきた。

実用書道は、老齢者には格好の趣味であり、それがまた老化進行のブレーキになってくれることと願っている。

思い出の一つ

内藤 幸一

思い出は多い。五十年前のことで、断片的だが多い。若くして、逝くなった友人が先ずなつかしい。灌木の鬱蒼と茂っていた天守台周辺の兜虫や蛇がなつかしい。雑草の繁茂していた運動場。周りを囲む松の並木。古い校舎。武道場。それぞれに思い出は深い。

思い出は多いが一つだけ書く。百田嘉喜先生のことである。

先生は多分私たちが三年生の時、赴任されて来られたと思う。広島文理大卒で、私た

ちは確か四年生の時、地理を受け持って貰った。

地理の一時間が一眼目に当たっていて、先生はよく遅刻された。その度に遅刻の弁解から授業が始まる。昨夜、読書に熱中して思わず寝過ごしというのである。そして読んだ本の話に脱線して行く。

私はその先生の脱線に驚嘆した。開眼したといった方がより適切だろう。今まで幼い読書から、遙かに高い精神の世界へ引き込まれる感激であつた。昭和十三年発行の「岩波新書」の話もあつた。西田幾多郎という名前も先生の口から出た。「ちえ！郷土の偉大な哲学者を知らぬのか」そんな先生の九州弁もなつかしい。その頃「知性」という雑誌が発刊されていて、先生の話に「知性」を感じ、忠谷書店へその雑誌を見に寄ったこともある。勿論、内容を理解できるはずもなかった。

私は今も読書が好きだ。老後の楽しみの中の唯一のものと言ってもよい。その読書への興味、より高い精神への道を開いて下さった先生は、外ならぬ百田先生であつた。今の自分につながることで、より一層思

い出深い、感謝の気持も深い。先生は先年、郷里佐賀で生涯を終えられた。ご冥福をお祈りすると共に、教師というものには、何かを生徒に与えるべき存在だとしみじみ反省をこめて思う。

(中学38回)

追憶

高桑 芳子

カチツという快いボールの音がひびいてゲートをくぐる。すがすがしいまでに冷たい今朝の早朝ゲートボールの試合であります。日曜日で試合のある時など準備の都合で朝四時、五時に出かけることもありませう。七、八年前から健康法の一つとしてはじめたゲートボールが今では私の生き甲斐であり、日課となつてしまいました。そしてゲートボールを通じて、多くの人達と友達になり、互いに健康を祝福しながら楽しい日々を送っています。学校時代の思い出は、遠い遠い昔のこととなつてしまいました。しかし忘れてしませんあの昭和五年の春の橋北の大火の年に私は学校を卒業しました。家のすぐ近くが出火場所だったのであの

時の光景を思い出すと今でもゾーンと身震いします。

学校では、勉強・洋裁・和裁とひたすらに花嫁修業に精を出す毎日でした。あの頃の友人も数少なくなり寂しい思いでございます。

戦前、戦中、戦後と、めまぐるしい社会の変化に、今日まで生き抜いて来ました。そして現在の何不自由のない生活を思う時、時間のある限り少しでも私にできるボランティア活動に参加して何かお役にたちたいと思う心で一ぱいでございます。

(市女4回)

俳句

鈴木英章

新教師がぶりと珈琲飲み下す
髭を剃る鏡の中のリラの花
芍薬を妻の眺むる朝餉かな

(高校8回)

木場潟の葦たち

加藤 久枝

木場潟は、県内で自然の姿を残す唯一の潟湖として貴重

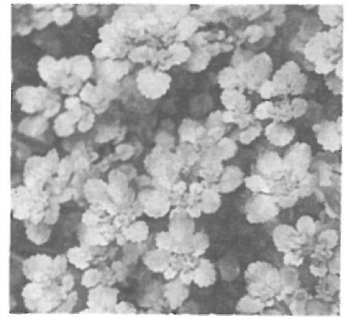
な存在になっています。

この木場潟は水郷的景観を生かしながら公園として整備されたお陰で葦原が昔のままに繁っています。

この葦原はアシだけが繁っているように見えますが、ここには葦原社会があつてアシのほかに多くの野草たちが互いに影響し合い乍ら仲よく住み分けています。

早春の葦原は枯野が原の様相を呈しています。この頃、他の植物に先立ってノウルシがぐんぐん伸びだして瞬く間に黄色の花をつけ、ノウルシ一色にしてしまいます。花は小さくて目立ちませんが花を取り巻く苞葉が黄色く冴えて春の到来を告げるのです。

やがて、ノウルシが実を結ぶ頃、葦原の住民たちが一斉に芽吹きの時を迎えます。細い筈のような芽をニヨキニヨキと突き上げて日毎に成長するアシやオギ・マコモ・ウキヤガラ等、それに負けじと急いで花を咲かせ、実を結んでアシたちが伸び切らない先に休眠を決め込むのは、ツボスミレやスズメノテッポウ・ミノフスマ・ハコベ・トウバナなどです。



一方、葦の枯草の陰で芽生えた蔓草は日光を浴びてぐんぐん伸び、アシやオギにからまったり、よじ上ったりしながら賑やかに葦原を採ります。アシだけが風にゆらいでいるかに見える木場潟の湿地にも、何種類かの植物が互いに影響し合いながら自然の植生を保っているのです。

(市女20回)

花見

野口さよ子

櫻狂いと言われても仕方ないと思っている。四月に入ると各地の花便りを見るのが楽しみにの一つ。今年は花の便りが早い。四月四日、友達と二人で急に公園の花見に出かけることにした。公園の櫻は七分咲きで最高の見頃、どの木の下も場所取りされ花見の宴で賑わっている。花見風景を

満喫し花の美しさに陶酔し次は天守台のお花見をとのこと小松高校の方へと歩いた。「敷島の大和心を人問わば朝日に匂う山櫻花」と教育された者同志、花を語り処世訓を語りつつ歩いていて意気投合やがて青雲の小径へ。この櫻は永い年輪と品格がある。



この径を歩いて思った。木にも気品があると言うことを。お殿様の櫻でしょうか。特に天守台の櫻は素晴らしい。二、三人の花見の人に逢っただけで勿体ない。その中の一人の方と花友達となり帰りは小松高校の正門迄御一緒した。もと小松高校の用務員の方のこと。二年程前に定年退職をしたが懐かしくてこの径へ花見しに来たこと。在職中の勤務内容、家族構成などお聞きしているうちに校舎前庭に出た。中谷吉郎先生の碑の前で立ち止まりこの様な偉い先生方が沢山卒業された立派で素晴らしい高校なのだと思います。

た。中谷先生のお宅が東京の本郷曙町に在り、先生が理研に通っていらした頃夏休みに二、三日お世話になったことなどに憶いを馳せ御冥福をお祈り校舎を後にした。

(県女14回)

八ヶ岳より

石田登志子

W様。先日は久し振りにお逢い出来て嬉しゅうございました。

あの日、前夜の雨で芦城公園の桜も散りかけていましたが、久々に園内を歩き、古木の多いのに驚きました。

八ヶ岳南麓のここ大泉高原にも漸く春の訪れを感じます。梅も桜もれんぎょうや雪柳も一せいに花開くのです。近くは落葉松林も新芽が少しずつふくらんできました。緑一色になる五月迄あと数日が待たれます。その時林の中の小道を行けば顔も手も青く染まるようです。

散歩しながら八ヶ岳、南アルプス、草土山、奥秩父の山々が望め、美味しい空気と水と言いますと、きっと皆様羨ましくて溜め息がでるのではと

自讀しています。
昨春秋、Oさん達数人がいらして下さって、二日間を小松弁で語り明かし少女時代に戻ったようでもとても楽しんでございました。

皆様と御一緒に、小泉の柳田泰雲記念会館では、中国五台山の一つ泰山名碑拓本展を見、長坂の白樺美術館では白樺派の書簡・雑誌白樺、そしてオルゴールの絵などを鑑賞し、清里では北沢美術館でフランスに咲いたアールヌーボーのガラス工芸を、またオルゴール館では数々のオルゴールをみてまわり演奏を聞き乍らパイプオルガン式のオルゴールにも驚きつつ昔を懐かしんだものでした。何しろ小箱の澄んだ音色の出るものしか知らなかった私達ですもの。

新緑の春、夏の涼しさ、秋の紅葉、冬は冠雪の山々、小鳥のさえずり星空等々自然が何よりのおもてなしです。県営牧場で草を喰う牛の群れを眺めながら、近山を歩くのも一興と存じます。

どうぞ今年こそお越しくださって、生きていることの至福を味わってみてください。ペンションをはじめて八年経

ちました。真心こめておもてなしをしたいと子供達も努力しております。ではお待ち致しております。

山梨県北巨摩郡大泉村
ペンション パステルモーン
ニングより
(原女29回)

明るき未来

石崎 貞明

「いざや作らん明るき未来」と言う校歌の文句は小松高校卒業生には懐かしい。実は、私は高校二年生の時、それを題名にドラマを書き、建部ホームの級友達と集会の時間上演したので尚更である。

数年前、その時主役を演じた園井洋一君を訪問した。彼が神戸製鋼にいた頃である。「君の部長室へ入れてくれ。働きざかりの園井の写真を撮っておかんなん」と言った。

人間は贅沢なもので、今暮らしている自分の実像の他に、もう一つの虚像を持って生きている。実業界で出世した彼が本当は学校の教師をしたかったと言うし、教師の生涯を終わろうとする私が若い時「教師のままの人生でいいのかな」と言う思いが頭をかすめたこ

ともある。しばらくでも二人が入れかわりできたら面白かつたろうに、時は容赦なく過ぎ去ってしまった。

彼は夜の神戸を案内してくれて、カラオケ・バーで「古城」を合唱した。ウエイトレスに母校の自慢をし、昔のドラマのラブ・シーンの説明をした。

「へえー、面白そうね。そのドラマ何て題名？」瞬間二人は顔を見合わせて、しばらく思い出せなかったのも御愛嬌であった。

さて、あの時代以来私達は明るい未来を作っただろうか。私は肯定する。いろいろマイナス面はあるにせよ、あの時代に比べれば今は豊かで明るい。英語の河合一郎先生がよく言われた。「戦争さえなければ、いい時代になりますよ。」その通りになったと思う。

ただ、先日テレビでアメリカでは今や親の世代とは豊かになれない時代が始まっていると報じられた時は考えこんだ。「いざや作らん明るき未来」と歌い続ける後輩達に、未来がいつも明るくあつてほしいものである。

(高校5回)

まわれ、まわれ

辰巳 平一

あの夏は忘れることはできません。7年前、85年の夏、小松高校野球部が、県大会で優勝しました。夏は、放送の仕事にたずさるものにとつて忙しい季節、高校野球となると目の色が変わります。そんな我々にとって、母校の活躍は気になるところ、緒戦、2回戦と勝ち進みベスト8になると、自分の中継担当試合そつちのけで、母校の試合を見てしまいます。85年の夏、決勝戦は、小松、県工戦でした。序盤に、早々と4点を取られたものの、2点ずつ返して、6回の表、記憶によれば、ランナーを置いて、バッター北野君。私の放送上のポジションは、優勝チームの共同インタビュアー。この時はTVの放送席、実況アナと解説者の横にいました。通路をはさんで、すぐ隣にも、他社が実況放送中。北野君、この時、ピッチャーの球を、うまく打つて、右中間真二つ、長打コース。私はと言えば、スタンドと同様、自分の仕事も忘れて興奮も極点に達し、手を大き

(高校19回)

短歌

少年なりし

土井 三良

広島に新型爆弾と聞かされし
葉桜の下壕掘りあしに

運動場は総て畑に起こしたり
バケツで下肥運ばされし先生
敵戦車に体当りする訓練の少年
年に夢の無き時代なりし

(中学47回)

― 県女三十五回 ―
すずかけの会

伊藤千枝子

五月二十四日、私達の学年会である、「すずかけの会」が奈良で開かれ、小松からの三十名を含め五十名近くが集まりましたが、私はその前日岐阜奥養老の製茶工場を尋ねました。というのは、三年前位に新聞で知った無農薬のお茶作りをしている組合が、毎年新茶の頂になるとお茶摘みを含めた楽しい催しをするので、かねが参加してみたと思っていたからです。

名古屋で東海道線に乗り換え大垣で降り、迎えの車で四十分ばかりで山間の製茶所に着きました。

東京から一気に来ただけに澄んだ空気がうれしく、毎日おいしくいただいているお茶を作っている機械、そこで働いている四名位の人達、電話で声だけ聞いていた方々、すべてが新鮮でした。

製茶の工程を機械を追って説明を受けたのですが、昔からの手作業と同じことを機械がかわってするのは、とても興味深いものでした。しかし生憎明日は雨の確率60%とか

で、お茶摘みはお休みとのこと、そのかわり当日は私一人のために社長さんと相対で、

手揉みのお茶作りを教えてくださいという幸運に恵まれました。

暖められた台の上で九時半から緑したたるばかりの蒸された若葉を揉み方を変えながら仕上げていきました。

昼食後は畑見学、機械刈りも少し体験し、奈良ホテルに着いた時は宴も始まっていましたが、出来たてのお茶を皆さんに賞味していただき、私のお茶作りは話の種の一つになりました。

(県女35回)

詩

朝露

古田のぶ

早朝目がさめた
どうにもならず起きた
小さな畑に歩を進め
ナスの葉っぱに
水晶のような
孫の目のような
朝露を見つけた
万物に精をあたた
朝露は
登る太陽とともに
何の文句も言わずに
消えてゆく
ああ 何か人生の
一齣のようだ

(県女33回)

― 高校第五回 ―
五松会の旅行記

谷口 健三

梅雨入り寸前の6月6日、第5回生(昭28卒)の同期会「五松会」が、関東在住の輪番幹事で浜湖畔館山寺レイクホテルで開催されました。「五松会」は、地元小松、関東地方、関西地方と毎年会場を変えて開かれ、常に約50名から70名の出席者があり、今年も男性16名、女性22名の元気が風光明媚な浜松に集まりました。三百四十三名の同期生の1/3が県外に住み、物故者27名です。

東京の松多(本陣)淑代さんの司会で、小松京町の伊勢弥生さんの本部報告に始まり、関西を代表して栗津出身の東幹男君の音頭で乾杯。女将の説明つき会席料理に舌鼓をうち、達(本仁)美弥子さん差入れの小松の漬け物がたちまち品切れの大好評。符津出身でパリ在住の足達竜太郎君から直輸入品のブランド品10点に加え、有志の寄贈した景品を福引し、喝采を拍しました。幹事部屋での二次会は、純粋小松弁でふるさと談義に刻の経つのも忘れて、延々と明

け方までのダベリング。寝不足の部屋もあったようです。

翌日の周遊バス観光には30名が参加。先ず女改めの厳しい気賀関所を通り、竜ヶ岩洞の2億5千万年の鐘乳洞内を1kmも歩き、名物の手作りアイスクリームで童心に返り、昼食は大盛のジンギスカンをダイエットを忘れてバクつき、奥山の臨済宗大本山方広寺で参禅(?)したり、井伊家の



菩提寺・龍潭寺で一服のお茶を頂き、小堀遠州作の庭園を心ゆくまで鑑賞しました。

家族へのお土産もあちこちで買い求め、「来年は40周年ヤソウ! 幹事は小松やさかい頼むゾウ!」と手を振り、肩をたたき合いながら解散したのは、6月7日午後3時過ぎのJR浜松駅でした。

(高校5回)

学校だより

◆平成四年三月七日、第四十四回小松高校卒業式が体育館で行なわれた。男子二百五十二名、女子百九十九名、合計四百五十一名であり、新しい小松同窓会の会員となった。本年度の大学合格状況は別表の通りである。ここ二・三年が第二次ベビーブームの世代が大学を受験する時期であり、入試は厳しさを増して来ているが、卒業生は難関大学を中心に善戦したといえよう。

◆本年、八月、九州の宮崎県で開催されるインスターハイにポート部とソフトテニス部が出場する。それぞれ県大会を勝ち進み出場権を得たのであるが全国大会での活躍が期待される。

◆公立学校が毎月第二土曜日が休業日となり、小松高校も九月より毎月一回、土曜日が休みとなる。三年生は自宅学習、一・二年生はかなりの生徒が登校して部活動と、今までの日曜日とあまりかわりないものと思われる。



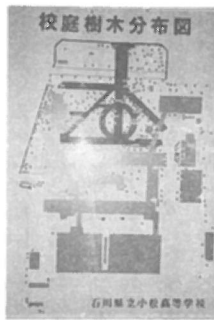
最近3ヵ年大学合格者数

大学名	4.3	3.3	2.3	大学名	4.3	3.3	2.3	大学名	4.3	3.3	2.3	
金沢大	法	8	8	2	富山医薬大	1	2	2	早稲田大	16	15	17
	経 済	5	2	12	福 井 大	8	10	6	慶 応 義 塾 大	2	10	7
	文	6	5	11	福 井 医 大	1	1	0	明 治 大	15	14	20
	教 育	21	13	24	信 州 大	9	8	14	法 政 大	15	19	22
	理	6	2	5	静 岡 大	13	12	8	中 央 大	14	10	13
	医	1	2	3	名 古 屋 大	7	4	4	日 本 大	20	25	20
	薬	4	4	2	名 古 屋 工 大	3	1	1	東 京 理 科 大	7	16	15
	工	19	24	21	滋 賀 大	6	4	0	関 西 学 院 大	15	6	7
計	70	60	80	京 都 大	7	14	7	関 西 大	21	31	19	
北 海 道 大	6	4	3	大 阪 大	8	7	5	同 志 社 大	23	25	27	
東 北 大	11	9	4	神 戸 大	9	4	9	立 命 館 大	27	31	39	
筑 波 大	0	6	8	九 州 大	0	2	0	京 都 女 子 大	10	7	7	
東 京 大	4	2	2	高 崎 経 大	3	1	1	そ の 他 私 大 計	373	273	231	
東 京 工 業 大	2	0	2	金 沢 美 工 大	4	4	2	私 立 大 大 計 学	558	482	444	
一 橋 大	1	1	0	都 留 文 科 大	5	3	3	短 期 大 大 計 学	111	86	85	
横 浜 国 大	5	6	7	大 阪 市 立 大	2	2	2	準 大 ・ 各 種 計				
新 潟 大	6	6	9	そ の 他 国 公 立 大	84	78	55	総 数	978	862	839	
富 山 大	34	43	76	国 公 立 大 計	309	294	310	卒 業 生 数	451	447	448	

本部だより

80歳以上の先輩へ
会報を直送します!!

小松同窓会では高齢化対策として、中学26回、県女16回、市女2回以前に卒業の皆様に対して、今回から同窓会報を直送することにいたしました。会報を手にとられて青春を偲び、金さん銀さんのように元気で長生きされるよう祈ります。



校庭樹木分布図

写真のパネルが完成し、校舎正面玄関のところに掲示されました。各期の卒業記念樹65本、その他の主な樹木の位置、樹木名が記されています。

◆平成四年度小松同窓会新年会は、一月十七日(金曜日)小松グランドホテルを会場に開催されました。出席者は百八十五名で司会は宮岡金次郎氏(高18回)が行い、亀田作雄氏(中22回)の音頭で乾杯、伊東清雄氏、西部英次郎氏のスピーチがあり、その後懇親会に移り、各回ごとにテーブルを囲み、にぎやかに懇談しました。最後に中学・県女・市女・高校の順で校歌を斉唱、塚林有明氏の音頭で万歳三唱し、閉会しました。



◆今夏、スペインのバルセロナを中心に開かれるオリンピックに、高校33回卒の坂田昌弘さんが出場します。坂田さんは、ボートのエイトの三番漕



手として参加するのですが、四年前のソウルオリンピックにもボートのシングルスカルに出場しており、連続出場となりました。ボート競技は七月二十三日からパニヨラスで開始されます。坂田さんの話によれば、今回のエイトは最強のチームであり、入賞も可能であるとか、期待しましょう。

第5号の原稿募集

- ◎切 本年11月末日
- ◎内容 自由(在学中の思い出に拘わらず、近況、体験、趣味、旅行記、文芸等歓迎)
- ◎長さ 六〇〇字以内
- ◎送先 同窓会本部 藤田宛
- ◎発行 平成5年1月新年会